

着物の楽しみ

第一東京弁護士会 佐々木 知子 (35期)

よく着物を着ている。行事やパーティ、単に食事会でも、可能な限り、着物で出かける。

昨12月の派閥忘年会にも着物で行った。2年前に銀座で誂えた米沢紬(紅花紬)に、母の茶色の洒落袋帯。紬はピンクを基調にオレンジ他様々な色が入っている。帯は茶色の薔薇模様入りだ。以前その帯を緑地小紋に合わせて呉服屋に行った時、「へえ、漆箔ですね。今はもう職人もおらず、貴重な帯ですよ」と言われ、漆の帯だと初めて知った。母も知らなかった。そんな話をスピーチでしたのが、この原稿依頼につながった。

「へえっ漆の帯ですか、見せてください」「触ってもいいですか」…。着物はいい。究極は桜の季節に桜模様。時々の草花や風物詩が描かれていたりすると、その風雅さにうっとりする。これぞ日本文化、着る芸術である。話も弾んで、いいことだらけだ。着るのは多少面倒でも、わざわざ着ていくだけの価値は、絶対にある。

この2年余、10月から5月までの間は天候の許す限り(雨や雪の日は着ない)、仕事をやりくりして夕方、事務所からタクシーで20分の自宅に戻り、着物に着替えて、出かける。朝に準備済みなので、正味の所要時間は約30分。着慣れればさほど難しいものではない。

着付けはネット動画で覚えた。歩行中に帯がほどけてくるなど、失敗談はいくつもある。帰宅後動画をまたチェック、試行錯誤の繰り返しで、だんだん上達した。1年目40回、2年目も同じくらい着た。そして今年が3年目。裾しほまりに、衣紋は抜きすぎずつまみすぎず…その加減が粋さであり、簡単なようでいて、なかなか難しい。昨春来、洗えるシルク長襦袢にして、手入れは格段に易しくなっている。

振り返って、昔から着物は好きだったと思う。何着か誂え、何か事があれば美容院で着せて貰っていた。以後完全に10年のブランクがある。長年ずっと洋服ばかり着ていると、季節が変わってももはや新しいデザインもなく、お洒落をする喜びも失せてきた。そうだ、着物だ…。年を取って体型が崩れても着られるし(後ろに手が回らなくなると困るが)、どこであれ、着物で行くことができる!

もっとも暑い夏にはダメだと分かったが、着物はとにかくコーディネートが楽しい。帯・帯締め・帯揚げが必



昨年3月、参議院協会創立40周年記念祝賀会にて。着物は、熊谷好博子作・鳥の子色牛首紬芥子の花図付下げ(帯は金茶色名古屋帯)。

需品なので、同じ着物でも帯を変えればまるで別物になり、また小物でも雰囲気さがらりと変わる。コーディネート次第で同じ着物や帯が幾通りもの場で着られるが、洋服ではこうはいかない。新しい着物や帯を手に入れ、手持ちの物に合わせてみる。頭で合うと思っても微妙な色のトーンで合わなかったり、まさかの色合わせが新鮮だったり、洋服にはない発見がある。

とはいえ、着物は、何をどこに着ていけばいいのか分からないと言う人も多い。そもそも形が同じなので素材などで格式を分けているからだ。一般に、染めはフォーマル、織り(紬)はカジュアル。前者も上から、留袖、訪問着(付下げ)、色無地、小紋となり、場の格式、出席者の立場(親族か友人か同僚か)などによって、帯を含めた詳細な着用コードがある。最初こそ私も詳しい人に聞いたり本やネットで調べたりしていたが、結局は、場の雰囲気と相手を思いやることを押さえていれば、あとは洋服のセンスで構わないと分かった。紬でも無地や訪問着はフォーマル感があるし、中で大島紬は光沢があるので、柄や色次第では格式の高いパーティに最適である。

全体に、昔の着物や帯のほうが絹の質も良く、技術も高く、凝った意匠のものが多いように思う。リサイクル店で新品同様の掘出し物を見つけるのも楽しいし、母や着道楽の伯母の着物も重宝している。寸法はできるだけ自分用に直す。布を入れ込んで作ってあり、かなりの対応が可能なのだ。直しの過程で分かったことは、母の藍大島はすでに生産がなく、伯母の珍しい緑色の黄八丈は「へえっ素晴らしい。これはもう作られていませんよ」(三越本店着物お手入れコーナー)。伯母の、茶地に凝った多色織りの郡上紬の直しがまもなく仕上がってくる。どの帯を合わせ、小物を合わせ、さてどこに着て行くか、とてもとても楽しみである。